

MiYAGi

まちづくりと 地域支え合い



CONTENTS

角田市、大和町、南三陸町、亶理町の生活支援コーディネーター4人による座談会が3月2日、仙台市青葉区のJAビル宮城で開かれた

2-5 特集・地域づくりへの挑戦 「これまで」と「これから」

生活支援コーディネーター座談会

司会・進行 宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局 及川一之

6 研修レポート

被災者支援の学びを平時に活かす人材育成

7 県外アンテナ 群馬県太田市

お宝の輝き DVD に

8 まちづくり短信

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局（宮城県社協）

宮城県内外の
生活支援コーディネーターおよび協議体の
取り組みを発信しながら、
住民や専門職・関係機関の意識を高め、
最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける
社会づくりを目指します。

vol.33
2021.3

特集・地域づくりへの挑戦

「これまで」「これから」

生活支援コーディネーター座談会

角田市、大和町、南三陸町、亘理町の生活支援コーディネーター4人が、地域づくりの苦労や醍醐味、今後への意気込みなどを座談会形式で語り合った。その主な内容を紹介する（司会進行Ⅱ及川一之、2021年3月2日収録、発言者敬称略）

被災者支援の経験が生きる

及川一之 今回お集まりの皆さんは、それぞれの市町の生活支援体制整備事業（以下、体制整備）の開始当初から、生活支援コーディネーターや地域づくり担当の立場でこれに関わっています。楽しさ、やりがいを感じるのとはどんなときですか。

岡本圭一郎 地域に出て住民に学ぶことに、楽しさがあります。コーディネーターとして、その地域に長年暮らす高齢者を訪問するとき、私が必ずするのが地名について聞くことと、漬けものをいただくこと。それをきっかけに、地域のことや暮らしのことをたくさん話してくれます。住民の力を肌で感じる瞬間です。

芳賀裕子 コーディネーターは地域にどれだけ出るか、ですよね。住民の反応は最初のうちは、「何しに来たの」みたいな感じ。何度も行けば顔と名前を覚えてもらって、「今度こんな集まりがあるよ」なんて連絡が来たりする。コーディネーターが何をする人かはわからなくても、存在を知ってもらうことが大事。関係をつくり、住民の声に、うまく応えることができたときは、やってよかったと思います。

青木秀利 地域に出て住民と関わるのは、おもしろいです。話を聞いていくうちに住民同士のつながりが見えてくる。意外なほど豊かなつながりがあった、あの人が困ったときにはこの人が手助けする、みたいなことがあり、まるで支え合いのチーム。私もチームに交ざって助けってもらったりしています。

佐藤寛子 住民は体制整備を知らなくても「困ったことは寛子ちゃんに言えばなんとかなる」ぐらいに思ってくれています。それがうれしい。以前、東日本大震災の被災者支援に携わっていて、そのことも関係しているかもしれません。役場の地域包括支援センター（以下、包括）からも、サロンなどの地域資源についての問い合わせが来ます。コーディネーターとして最

初の2年間は役場の包括に向向していました。そうして得たつながりのなかで頼りにしてもらえると、やりがいを感じます。

及川 被災者支援の経験も生かされていますか。

佐藤 被災者支援の頃からのつながりは切れていないので、地域住民との関係性という点で、かつての経験が生きていると思います。

芳賀 生活支援相談員として被災者支援をしていたときにつながった人との関係が、いま地域に入るときの手がかりになったりします。仮設住宅の戸別訪問は、地域に入って住民に関わる訓練にもなりました。

青木 岩沼市で生活支援相談員として被災者支援をしていたんですが、最初は私一人だけで、途方に暮れました。飲みものとおめを持って自転車で行き、出会った人に「水分補給して」「おめ食べて」なんて声がけすることから始めました。その苦労の経験があるから、いま地域に入って行けるのだと思います。

つながりが災害の備えに

及川 一昨年10月の台風19号では、角田市と大和町は大きな被害があり、社協が災害ボランティアセンターを開設しています。どう対応しましたか。

岡本 災害ボラセンが、行政区の自主防災組織とうまく連携できたところもあります。自主防が地区内の被災調査と支援ニーズのとりまとめをしてくれて、ボラセンは自主防から要請があった人数を派遣。現地に入ったボランティアは、自主防が決めた優先順位に従って被災家屋の片付けなどをしました。すべての行政区ではあ

りませんが、この方式を台風19号でやってみて、有効性を確認しました。住民同士のつながりができてきている地区は、災害時の自主防の活動も円滑でした。平時の地域づくりは、災害の備えにもなるわけです。

青木 災害ボラセンの運営では、各区の区長や民生・児童委員と一緒に、支援が必要な人がどこにいるか調査し、どんな支援を行うか、話し合いながら進めました。ボラセンには、浸水被害がなかった地区から多くの住民が手伝いに駆け付けました。そのなかには、

コーディネーター活動で関わりを持った人も多くいました。普段から地域づくりに取り組み、支え合いの意識を高めてもらうことは、災害時にもしつかり生きる実感しました。ボラセンを通じて、地区を越えて支え合う状況も生まれました。不謹慎な言い方ですが、災害は支え合いを広めるチャンスかもしれません。**及川** 連携ということで言えば、行政や包括とはどうですか。角田市は、社協と包括が同じ建物ですね。

岡本 包括まで歩いて百歩くらいの距離ですから、何



佐藤寛子さん 46歳
(巨理町社会福祉協議会主任)
2017年度～生活支援コーディネーター



芳賀裕子さん 35歳
(南三陸町社会福祉協議会)
2016年度～生活支援コーディネーター



青木秀利さん 32歳
(大和町社会福祉協議会)
2017年度～生活支援コーディネーター



岡本圭一郎さん 47歳
(角田市社会福祉協議会事務局次長・地域福祉係長)
2016年度～生活支援体制整備事業担当、
2017年度～生活支援コーディネーター



及川一之 56歳
(宮城県社会福祉協議会震災復興・地域福祉部次長兼地域福祉課長)
2017年度～宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議事務局

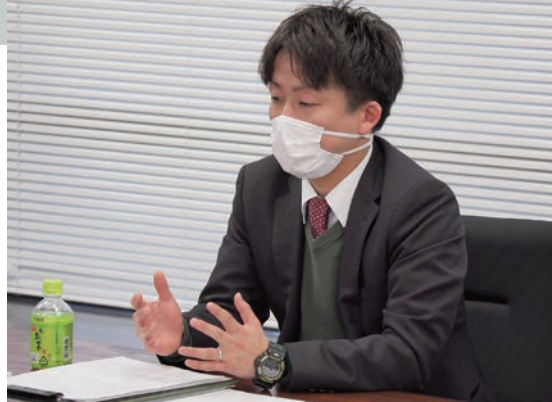
かあればすぐ行きますよ。元々社協と行政（直営包括）とで連携して事業をやっている部分もあるので、包括の職員とは気軽に話をしたり、必要と思ったらなんでも相談します。包括にも生活支援コーディネーターが3人いて、毎月1回、社協と包括のコーディネーターが集まって連絡会議を開いています。

及川 連携や情報共有に関連して、体制整備の開始当初から課題として言われているのが、コーディネーターの孤立。介護保険の枠組みで地域づくりを担うという、従来にない仕事への関係者の誤解や理解不足が背景にあると思います。皆さんはいかがですか。

佐藤 居宅介護支援事業所のケアマネジャーとか病院の医師とか調剤薬局の薬剤師らと関わりを持ってました。役場直営の包括だったので、役場のほかの課の職員とも連携できました。町の広報紙を最大限活用し、地域の住民活動などを記事で紹介することもできました。包括の窓口業務をすることもあって、介護保険の申請でデイサービスを使うしかないと思いついて窓口に来た人に「この地区はサロンもありますよ」と提案し、介護保険サービスを使わずに済んだことが何度か

あります。いまも包括からは、利用可能な地域資源の問い合わせがときどきあります。

正解もゴールもない活動



青木 大和町は、役場の事業担当がとても熱心に関わってくれました。役場、包括、社協で第1層協議体を構成し、年3〜4回会合を持ちます。ただ、多職種との情報交換は活発とは言えません。今後の課題です。

佐藤 最初は「コーディネーターは何をするの？」と悩みました。ただ、包括や役場の職員が地域に出ることを勧め、地域で住民と交わる私を「それでいい」と認めてくれました。それがあったからこそ。この事業は「これをやれば正解」というのはないし、明確なゴールもない。住民と関わることで何をすべきかが見えてくる感じです。そうなるまでに、2年くらいかかりましたね。



岡本 積極的に地域に出て行くということ自体、うちの社協の事業ではあまりできていなくて、組織内部でもコーディネーターの動きが理解されにくく、一人で悩む傾向があったと思うんです。そんな状況を変えようと、当初1人だったコーディネーターの配置を、私を含め地域福祉系の職員4人全員ということになりました。人件費が4

人分出てなくても、とにかく地域福祉係はみんなコーディネーターっていうことにして、皆が地域に出て、一緒に話し合える体制にしました。場合によっては2人1組で動いたりもしています。

及川 地域に出ることにに関しては、いわゆる「地域のお宝」を探すという目的もあると思いますが。

佐藤 あえて探すというよりは、サロンで話を聞くなかで、家でもお茶飲みをしている、みたいな話を聞いて訪ねていく感じ。お宝情報を集めて、それでどうするか、成果としてどう示すかっていう課題もあると思います。

岡本 うちの「お宝」という言い方だけでなく、日常の小さな集まりやその場での支え合いは「地域資源」「地域活動」とも呼んでいます。これらを情報としてただ集めるのではなく、何よりも、高齢でも自宅で元気に暮らし続けるのに必要なものだったということを当事者や周囲の人たちに理解してもらうことが大事。小さなお茶飲みも資源なんだって、自信を持って継続していけるよう応援する、まずはそこから思っています。

日々の積み重ねを忘れず

及川 コロナ禍での活動についてはどうですか。

青木 とにかく、できるだけ町内を歩き回り、見かけた人に



声をかけ、情報収集してました。6月に、つながりや健康を保つ工夫をチラシにして配布。8月にはサロンなどの活動再開に向けたガイドラインをつくって配布。11月に住民アンケートを取って、その結果を踏まえて今年3月、サロンや見守りについての住民向け情報交換会を開きました。

芳賀 昨年4月から5月にかけて自宅でできるキルトづくりワークショップをやって、キルトをつなぎ合わせて一枚ののれんにするというのをしました。合い言葉は「心は密に」。約180人が参加したんですが、これまでサロンやイベントに来ない人も大勢関わってくれて、住民とのつながりを広げられました。

佐藤 災害公営住宅を中心に「わたりズム体操」っていう町の体操の普及活動をしたり、民生・児童委員と一人暮らし高齢者約600世帯を訪問し、手づくりマスクを配布したり。サロンの代表者向けに感染防止の勉強会もしました。

岡本 去年7月に包括と共同で、サロングループ向けに情報交換会を開きました。窓を開けて外を向いて歌を歌うとか、もつと小さな集落単位でサロンを開くとか、いろんなアイデアが出ました。コーディネーターは、以前からもやっていたことですが、いまは特に屋外の集いの場を中心に地域まわりをしています。



及川 締めくくりに、今後に向けた抱負を。

芳賀 地道に、焦らず、住民と一緒に、ですね。コーディネーターだけでは何もできませんから。役場や包括や社協も巻き込みながら、みんなで地域を盛り上げていきたいです。

青木 コーディネーターだけが「コーディネーター」として動くのではなく、地域住民はもちろん、包括、役場、介護・福祉の事業所や地域づくりNPOの職員などに「コーディネーター」を増やすことが目標。いまはその下地づくりです。

佐藤 地域でこの事業の説明をしたとき、ある区長さんが「この町で安心して最期を迎えられるようになってることだね」と言いました。その一言に尽きる。だからこそ、いまある地域の活動が大事とか、介護サービスを使っても家で元気に暮らし続けるようにしようとかを考え、話し合う。ずっと私のテーマです。

岡本 「地域」とは要するに、住民一人ひとりの連なりというか、人のつながりであって、地域づくりはつながりづくりとも言えます。今日始めて、明日結果が出るものではありません。

コーディネーターの仕事は、長期の積み重ねでようやく効果がでてくるものだと思います。それを忘れないようにしたいですね。

及川 貴重なお話をたくさんいただきました。ありがとうございました。

おわりに

楽しみながら地域づくり

及川一之

座談会を通じて改めて強く感じたのは、生活支援コーディネーターとして意欲的、積極的に活動する人は、そもそも住民と接するのが好きで、楽しみながら地域づくりに取り組んでいる、ということだ。

そんな人たちでさえ、所属組織や行政などとの関係のなかで孤立してしまうと、いい仕事はできません。上司や同僚、事業担当らがコーディネーターの役割と業務のあり方を理解し、地域に入ることを支援し、それによって得られる成果をきちんと評価することが求められます。

体制整備をきっかけに、私たちは、これまであまりつながっていなかった住民とも広く関わりを持てるようになりました。地域づくりは高齢者だけでなく、幅広い世代へ波及する可能性を秘めています。それは、宮城県の体制整備が一貫して「地域のお宝」を生かす方針のもとで進められていることも関係しています。

お宝を探し、その情報を共有し、価値をみんなで認めて守っていけるようにするのは、地域づくりの土台です。この土台のうえに適切な個

別支援のあり方を考え、事業の成果を出すシステムづくりを行うべきです。

コロナ禍でサロンやミニデイが中止されても、小さなお宝的つながりは切れなかったようです。それが何らかの事情で切れざるを得ないようなときこそ、サロンや各種生活支援サービスを上手に使って、新しいつながりを育めればいいわけです。

誰もが楽しく地域づくりに参加し、お宝とサービスが調和する社会を、私たちは目指したいと思います。



座談会は3月2日、JAビル宮城（仙台市青葉区）会議室で開かれた

被災者支援の学びを 平時に活かす人材育成

「生活者目線の人材育成」をテーマにした研修会を、2021年2月26日（金）にオンラインで開催しました。講義いただいた東北学院大学地域連携センター特任教授の本間照雄さんのお話をダイジェストでご報告します。

3種類の相談員

- ① **巡回型支援員**…サテライトセンター6か所に110人を配置。支援員の基本形態。
- ② **滞在型支援員**…独居、高齢者、要支援者など本来見守りの対象となる方（平均年齢74歳）を積極的に人選。仮設住宅団地で100人が従事。
- ③ **訪問型支援員**…帰郷の思いをつなげるために、みなし仮設を訪問。12人3班体制。

人材育成について、東日本大震災で甚大な被害を受けた南三陸町社会福祉協議会の取り組みから紐解きます。南三陸町では、被災者生活支援センターを2011年7月に設置し、3種類の相談員を配置しました（表参照）。

特徴は、被災住民を被災者支援の担い手として育成した点です。彼らの住民としての知恵に着目し、被災者支援の先にある復興・発展のための地域福祉人材にと考えました。そのため、三層構造による効果的支援を図るとともに、相談員自身の潜在能力や可能性を引き出す取り組みを心がけました。

資格のある専門職とは異なる、被災当事者としての共感性や生活者の立場からの気づき・寄り添い、そして住んでいる地域や人を知っている強みが、「市民的専門性」として活かされました。そして実際に、生活支援相談員の経験者は、地域福祉の人材バンク「ほっとバンク」に登録して活動しているほか、民生委員などの地域活動や福祉の仕事に携わって活躍しています。

違う角度から見れば、被災者を雇用して賃金を支払い、自立支援と被災地の経済復興につながる取り組みでもありました。

創意工夫を引き出す

町民の多くは、自分が生き残った意味や、人の役に立ちたい、町をなんとかしたいという思いを抱いていました。あえて相談員のマニュアルはつくらずに、実践のなかで創意工夫を引き出し、それをシステム化しました。地元の生活文化や生業に基づく活動は強

靱で、あたり前だと思っていたその良さを、再評価する機会にもなりました。持続可能な取り組みとするために、活動の目標を設定し、ノウハウを指導するのではなく、取り組む意味を解説し、本質の理解を深めたことも有効でした。この被災者支援の知見は、平時の地域づくりにも役立つものです。

住民とともに考える！

南三陸町社協では、あらゆる事業で住民とともに考える運営委員会方式をとっています。住民が主役になる仕掛けです。この基盤が、コロナ禍でも思考停止にならずに、みんなの創意工夫で乗り越える姿勢につながっています。

これから求められるのは、新たな生活様式を取り入れながら、福祉文化を創造し、最終的に住民参加のまちづくりを目指す視点です。必要なのは社会的役割づくりで、それが地域力の醸成につながります。

受講者の感想

地域を熟知している住民の強みをいかし、主体的に地域づくりができる仕組みの必要性が参考になりました

地域活動を通して人材を発掘し、地域支援を行いながら人材を育成する手法を知りました

お宝の輝きDVDに

群馬県太田市

【太田市(おおたし)】群馬県南部に位置し、自動車産業中心の工業都市として発達。郊外には田園地帯も広がる。人口22万4255人、9万8313世帯、高齢化率25.9%(2020年9月末)。市域は16行政区で構成され、生活支援体制整備事業の日常生活圏域(第2層)は単独または複数行政区で14地区を設定。生活支援コーディネーターは、市社会福祉協議会の地域福祉係に第1層1人、第2層7人(2地区ずつを担当)を配置。



太田市社会福祉協議会に所属する8人の生活支援コーディネーター(右から4人目が第1層コーディネーター小林正和さん)

太田市社会福祉協議会の生活支援コーディネーター8人が2020年6月から、コロナ禍でも切れない住民同士のつながりと、つながりのなかで日々行われる見守りや支え合いの地域のお宝Ⅱを取材。広報紙「つながる通信・太田市版」(市社協ウェブサイトで配信)などに記事を掲載し、広く周知する取り組みを

続けている。

今年2月には、お宝の具体例とその意義や価値をわかりやすく伝える映像資料の制作にも着手。新年度以降、第1、2層協議体などの話し合いの場で活用する予定だ。

映像資料は、2月18日に市社協が開いた取材成果報告会の録画に、コーディネーターが取材現場で撮影した写真や動画を加えて編集、DVDに収録する。

その報告会には、第1層協議体のメンバーをはじめ、市社協の会長以下役員、市の介護・福祉・まちづくり支援などの関係課職員ら計約30人が出席。取材対象となった「地域のお宝Ⅰ住民の一部も参加し、会場でのインタビューに応じて親しい仲間同士で日頃気にかけて合う様子などを語った。途中から市長も駆け付け、コロナ禍での支え合いを高く評価した。

当初、数百人規模の「お宝発表会」として企画していたものを、コロナ対策で参加を制限、映像資料制作のための報告会に衣替えして実施した。報告では、コロナ禍におけるお宝を――①以前と変わらないつながり ②新しく生まれたつながり ③つながりを切らない個人の工夫

④サロンなどの集いの場を継続する工夫――の4つに分類、それぞれ3事例ずつ取り上げている。

たとえば①の一つとして、夫婦二人暮

らして足の不自由な妻がデイサービスから戻ってくる際、隣家の一人暮らし女性が迎えに出、夫が勤めから帰宅するまで妻と一緒に過ごし、食事の支度も手伝っている事例が挙げられた。担当コーディネーターは、「夫婦は安心して在宅生活を継続でき、一人暮らし女性も孤立を防げる」とその意義を説明した。②は、地区の見守りを兼ねたグループ・ウォーキングや神社のボランティア修繕活動など。③は、手づくりマスクの配布や絵手紙のやり取り、スマホのビデオ通話アプリの活用など。④は、さまざまな感染予防策で継続するサロンなどを紹介した。

同市では、コロナ以前の2019年度からお宝を生かす地域づくりが本格化。コーディネーターが協議体とも連携しながらお宝を掘り起こし、発表会や広報紙で「見える化」を図ってきた。ちなみに中心商店街では理容店、時計・眼鏡店、喫茶店、スナック、朝市なども高齢者の集いや見守り、健康づくり、支え合いの拠点として発見されている。

市社協地域福祉係の課長補佐で第1層コーディネーターの小林正和さん(53歳)は、「お宝の掘り起こしで住民の力を再認識させられた。今後この力を高める支援を行っていきたい」と話す。

コロナ禍でも、コロナ禍だからこそ、お宝は輝く。その輝きが、少しずつ広がっていく。

利

高校生も高齢者訪問（色麻町）（2月15日）

色麻町社会福祉協議会の生活支援コーディネーター菅原一杉さんに、最近の地域づくりの取り組みを聞きました。

コロナ禍で外出の機会が減った高齢者を見守ろうと、公募で集まったボランティア15人が、昨年11月から70歳以上の一人・二人暮らし世帯を対象に訪問活動を開始。町内25地区の区長、民生・児童委員らに加え加美農業高校の生徒も協力し、月1回約200世帯を訪問します。マスクや除菌用品のほか、高校生がレシピを考えたお弁当も届けます。事業期間は3月末までですが、好評を受け継続を検討したいとのこと。

協議体では、移動支援についての話し合いが、2020年度からの「高齢者等タクシー利用助成事業」実現につながっています。

まちづくり
通信

宮城県地域支え合い
生活支援推進連絡会議事務局
(宮城県社会福祉協議会)
(2021年2~3月期)

サロンの再開・継続を模索（川崎町）（2月16日）

川崎町では、生活支援コーディネーターは第1層7人＝町保健福祉課地域包括支援センターの保健師3人と住民4人、第2層22人＝行政区のサロン代表1人ずつ、第3層18人＝訪問B事業の活動員＝という配置です（2月時点）。最近の動きを保健師で1層コーディネーターの菊池明子さん、村上美紀さん、秋葉敦子さんに聞きました。

行政区が開くサロンは第2層協議体とも位置付けられ、コロナ禍のサロン活動について研修を実施するなどし、再開・継続に向け模索中。訪問Bは家の掃除やゴミ出しなどの日常生活支援を行うもので、地域包括支援センター（町保健福祉課内）と町社会福祉協議会が連携して活動員と利用者をマッチングしています。

同町では、第1層コーディネーターと地域おこし協力隊の協働によるサロン訪問や、役場各課と病院との地域包括ケア連絡会議などが行われています。参考になる取り組みが多く、今後注目していきたいと思います。

幅広い情報の発信に努めます 支え合い事務局より

新型コロナウイルス感染症拡大に伴う活動自粛で、私たち事務局も市町村訪問などが思うにまかせず、2020年度はすべての市町村を訪ねることはできませんでした。

幸いにして訪問がかなったところでは、多くの情報に接し、「お宝」と呼べる貴重な活動などを教えてもらいました。

コロナ禍においてもさまざまな立場、領域で地域づくりに取り組む皆さんのお話を聞くと、私たち自身の高齢期にも光が差すようで、心強く感じます。

改めて、この紙面を借りてお礼申し上げます。

多くの生活支援コーディネーターが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、従来と異なるアプローチで地域と関わっています。視点や関わり方が変わったことで、コロナ禍だからこそできた新たな発見——地域のつながりや、その強さなど——も多かったようです。

事務局では今後も幅広く情報を集め、皆さんに発信していきたいと考えています。新年度もよろしくお祈りします。

お知らせ

本紙は宮城県から委託を受け2015年11月に創刊し、県内の自治体・社会福祉協議会、地域包括支援センター、障害者相談支援事業所、地域子育て支援センターなどにお届けしてまいりました。

2021年4月からは形態を変え、これまでの紙媒体から、ホームページでのネット公開とさせていただきます。ダウンロード可能ですので、引き続き情報紙をご活用ください。バックナンバーも掲載しています。

■ https://www.clc-japan.com/sasaeai_m/



問い合わせ・情報提供は
お気軽に事務局まで

電話022-266-2621
担当：佐藤正、菊池琴美

住み慣れた地域で暮らし続けるためのお宝探し情報紙

Miyagi まちづくりと地域支え合い vol.33

バックナンバーがホームページで読めます http://www.clc-japan.com/sasaeai_m/

発行日 2021年3月30日

発行 宮城県保健福祉部長寿社会政策課

編集 特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）